

# 謡曲・仕舞に関するお稽古のあれこれ

## I 稽古に関して

- ① 謡曲や仕舞を習うに当っては、先生について1対1の個別指導を受けるのと、カルチャー教室や企業のクラブなどで先生から団体稽古で習う方法があります。

現在この資料を見ておられる方は、平戸仁英先生が主宰されている白謡会に属して、謡曲・お仕舞の稽古をしていることになります。

- ② 月謝は、どこで習うかによって異なりますが、稽古場所でそれぞれ取決めがありますので、関係者に尋ねる必要があります。なお、一般的に個別指導を受ける方が、団体稽古に比べて多少負担が大きくなります。

- ③ お稽古に際しての必需品は、謡本のほかに扇子・白足袋（お仕舞の時）・筆記用具等です。

- ④ 師範免状を所持しておられるプロの先生（能楽師・〇〇師と云われる）に習う場合は、許状が必要となる事があります。観世流では、入門（5～1級の平物を習える）・準九番習・九番習・重習（1曲ごとで、初伝・中伝・奥伝・別伝とある）の区分があり、段階的に取得を勧められます。また、習い物については、別途伝授料が必要となります。なお、舞囃子（お仕舞を含む）についても、初習・中習・奥習・別習の区分（入門については謡と共通）があります。

- ⑤ 稽古は「礼に始まり、礼に終る」と言われ、

☆稽古場に着いたら、先生や先に稽古に来ている人に挨拶します。

☆自分の稽古順が来たら、まわりの人に「お先に」と挨拶します。

☆先生に直面して正座し「お願いします」と始めの挨拶ではじまり、終わった時も「有難うございました」と終りの挨拶をします（扇子の扱いは次項で）

☆順番を待っている間も、静に他人の稽古を聞くことが大切です（自分の勉強にもなります）、私語は厳禁です。

- ⑥ 先生の謡をシッカリと聞き、十分納得したものをメモします。また、一度直されたら二度と同じ所を直されないように注意することが必要です。なお、先生の許可があればお稽古を録音することも出来ます。

- ⑦ お稽古（特に仕舞の時）をする際は白足袋を着用し、時計・メガネや装飾品は外しておきます。

## II 稽古に関して (その2)

### ① 見台について

観世流の見台は、九代目太夫の工夫になる物で「わが宿は菊をまがき籬に露敷きて月に謡へるへうたむ瓢箪の声」の歌の意味を表し、左側に(八分目の)月が、右側に瓢箪が彫り取られています。従って、見台を置くときはその向きに注意する必要があります。(瓢箪のようにお腹を膨らませ、口を締めて八分目に謡えという教えが込められているそうです。)

### ② 無声音について

ウミ字の響かない音(囁く様にする)で、詞章に強弱を付けるために必要なことです。拍子に合わない所・詞・クドキなどの、カ・サ・ハ・タ行の「キ」「ク」「シ」「ス」「シュ」「チ」「ツ」「ヒ」「ピ」「フ」「プ」の11文字で、この他に、「コ」が二つ重なる時に限り、最初の「コ」の字を無声音にします。ただし、その音をモツ時には無声音とはなりません。

### ③ 鼻濁音について

ガ行の「ガ」「ギ」「グ」「ゲ」「ゴ」の五文字を鼻にかけて、柔らかく濁って発音することで、語頭の場合や一区の途中でも継目に用いられている場合を除いて(この時は濁音)は、鼻濁音に謡います。例としては、

高砂 → 「高砂の」や、橋弁慶 → 「心すごげに」等ですが、  
謡い分ける例としては、

げにげに・言語道断ごんごとうだん・供御ぐご・権現ごんげんなどで、最初は濁音で二字目以降は鼻濁音とします。

### ④ 必ず謡うイロ

道行やそれに準ずる上歌と待謡などの、終りから三句目の下の句四字目のイロは、必ず謡い(アツカイ)ます。

### ⑤ 扇子の表裏

お能の中啓扇と異なり、お仕舞で用いられる鎮扇は、一般的に表裏が同じ模様で、表と裏の区別がなかなか判りませんが、開いた時に中骨のツヤのある方が表となります。

### Ⅲ 稽古順に関して（長く・楽しく稽古するために）

- ① 謡曲は式能から発しており、翁（神歌）に続いて一番目から五番目までの五番立の考えが、序・破・急の考えと共に残っています。

序は一番目物で脇能とも云われ神様の曲（神）、破はその中が三つに別れ、二番目物の破の序は修羅物として武将の夢幻能（男）、三番目物が破の破で鬘物とも云われる女性を主とする曲（女）、四番目が破の急で雑能と云われる狂女・武人・その他の曲（狂）、最後の五番目物が急で、切能と云われる鬼畜類・遊樂の曲（鬼）となります。

大成版の観世流初心謡本も、上・中・下の各巻ともこの考え方から構成されています。

- ② 稽古の順は、観世宗家が制定した「等級季節表」に基づいて、自分の実力や季節区分を考慮して稽古を積むのが基本となります。
- ③ しかし、二百番余の曲の中から順番を着けて、稽古曲を選定するのは容易な事ではなく、古典文学や歴史に因んだ曲の中から、関連づけながら稽古する方法もあります。

例として、

源氏物語 … 葵上・野宮・浮舟・松風・夕顔など

平家 〃 … 清経・敦盛・実盛・屋島・頼政など

万葉集など … 草子洗小町・求塚など

中国の歴史 … 猩々・邯鄲・楊貴妃など

- ④ 更に目的意識を持って、曲趣や類似の曲を選んで稽古する方法もあります。

勝修羅三番（田村・屋島・箆）とか、三婦人（大原御幸・定家・楊貴妃）や三鬼女（葵上・道成寺・安達原）など、重いものでは三読物（勸進帳・起請文・願書）や三老女（関寺小町・檜垣・姨捨）などと云うように。また、シテなどの語りの曲や文（フミ）の入った曲や、難クセと云われる歌占・白鬚・花筐などです。（付録を参照）

- ⑤ その他にも、特定の人物を扱った曲や草木・花に因んだ曲を、集中的に習うなど色々ありますが、要は曲の好き嫌いを持たずに、数多くの曲に親しみ謡い込む事が、謡曲と長く付合っていく方法かと思えます。

例としては、源義経に因んだ曲や小野小町に因んだ曲、子供を捜し求める曲などです。

⑥ 五番立と曲例

初番目物	(神物)	神霊	:	高砂、老松、右近、玉井、賀茂、絵馬
二番目物	(修羅物)	武士の霊	:	敦盛、清経、実盛、屋島、頼政、通盛
三番目物	(鬘物)	美女の霊	:	井筒、江口、野宮、松風
		草木の霊	:	芭蕉、杜若、西行桜
		老女	:	関寺小町、姨捨、檜垣
		現世の美女	:	熊野、千手、大原御幸
四番目物	(女神物)	女神	:	龍田、三輪、葛城
	(妄執物)	地獄の男女	:	玉葛、船橋、善知鳥、求塚
	(狂女物)	狂女	:	班女、花筐、三井寺、隅田川
	(男物狂物)	男物狂	:	芦刈、歌占、高野物狂
	(芸尽物)	美男僧等	:	花月、自然居士、放下僧
	(唐物)	唐人等	:	邯鄲、天鼓、一角仙人
	(直面物)	現世の武士	:	安宅、鉢木、橋弁慶、盛久、七騎落
四・五番目物	(霊験物)	神霊	:	谷行、藍染川
	(祈物)	怨霊	:	葵上、道成寺、安達原
五番目物	(早舞物)	貴人の霊・女菩薩	:	玄象、融、須磨源氏、當麻、海士
	(鬼畜物)	鬼畜等	:	野守、鶺鴒、殺生石
	(鬼退治物)	鬼	:	大江山、土蜘蛛、紅葉狩
	(天狗物)	天狗	:	車僧、大会、鞍馬天狗
	(祝言物)	精霊等	:	石橋、猩々、小鍛冶

#### IV 謡の等級

謡曲には、演じる順（番目物）・季節の他に「等級」の別があり、観世流では、5級から1級までの「平物」と、準九番習・九番習・重習という「免状物」とに分かれ、稽古をする際の目安となっています。この等級は、単に節の難しさや曲の長さで決まってくるわけではなく、実に色々な要素（そのシテを、その曲らしく演じることが難しいかどうかなど）が絡まって決められているようです。

##### ① 入門（平物）

以下、この項は省略

## V 扇子の扱いに関して

- ① 発表会等の公式の場では、基本的に紋付（着物・白足袋）に袴を着用し、左側の袴のヒモ（女性が着流しの時はおびじめに）に扇子を差します。
- ② 舞台に出て着座したら、謡本を見台等に置き、右手で扇子を抜取って一旦自分の右側へ置きます。
- ③ 謡本のページを開いて準備をします。
- ④ 地頭等（お役の人と合わせて）の合図があったら、右手で扇子の中程を持って前へ回し、左手を地紙に添えて（右手は要の方へズラス）自分の前に置き、両手を袴の中に入れて自分の出番を静に待ちます。
- ⑤ 自分の謡う3句前になったら、両手を袴から出して一旦膝の上に置き、2句前に両手で扇子を両手で取上げて膝の上に戴き、1句前で左手を放して扇子の先を下に着け、息を整えて謡い出します。
- ⑥ 謡本のページをめくる時は、両手を袴から出して一旦膝に置き、右手でページをめくり、終わったら再び両手を袴の中に入れます。なお、指を舐めてページをめくることや、左手で扱うのは論外です。
- ⑦ 謡っている途中でめくる時は、扇子を上げて膝の上に置いて左手で支え、右手でページをめくり、終わったら再び扇子を右手で持って扇子の先を下に着けます。
- ⑧ しばらく謡う処が無い時は、下に着けた扇子の先を上げて左手を添え、一旦膝の上に戴いてから自分の前に置き、再び両手を袴の中に入れます。
- ⑨ 謡が終わった時は、両手で扇子を一旦膝の上に戴いてから前に置き、右手で扇子の中程を持って右側にズラシてから取上げて、再び袴の左側のヒモに差します。（動作はお役の人に合わせて行います）
- ⑩ お稽古の時も、この扱に準じて扇子を扱って居ると、会の時もスムーズに扱えます。

## VI 発表会等に関して

### ① あいさつ

☆会場に着いたら、まず先生に「本日はよろしく申し上げます」などと挨拶をします。

☆また、社中（同じ先生の稽古仲間）や流友の方々にも忘れずに挨拶を行います。

### ② 出演準備

☆会の進行が変更になっても良い様に、早めに着替えて準備を完了しておきます。

☆お手伝い等の係を依頼されている場合は、自分の出演の間を除いて、それぞれれの与えられた仕事を分担遂行します。

### ③ 切戸口で

☆自分の出番の前のプログラムが始ったら、集合場所に集り地頭等の点検を受けます。

☆また、省略箇所や出演についての指示を受けます。

☆舞台では、一般的に初心者は前列の方に、先輩・熟練者が後列の方に着座（同じ列であれば端の方から。お先にどうぞと云う気遣いは却って失礼になります）するので、地頭等から並び順の指示を受けます。

☆従って、自分のならば列の人数が定ったら、お役の人の着座位置や前列の人との関係から、自分の着座位置を推定（何人分ズレルとか前の人に重なるとか）しておきます。

☆地頭の着座位置は、後列が4人の場合は見所に向って左から2番目、5人の時は中央に座ることとなっています。

☆地頭等の点検を受けた後は、切戸口手前の待合場所で静に自分の出番を待ちます。

☆舞台に出る前に、地頭の発声で出演者一同が挨拶（お願い致します）をします。舞台から下がって来た時も同様（ありがとう御座いました）です。

### ④ 舞台での着席順など

☆切戸口は一般的に低いので、頭をぶつけない様に膝を曲げ体を丸めて、左足から舞台へ入り、両手（見本の場合は左手のみ）を袴の股の所に当てて、摺足で動くのが原則（ドタドタと歩くのは厳禁）です。

☆お役の人に続いて地謡の人も舞台に出ますが、お役の人は見所に向って左（切戸口に近い方）から謡本に記載されている順に着座し、地謡の人も2列目の左から順次着座（一方に片寄らないで真中になる様に）して行きます。

☆扇子の扱については、前に述べたとおりです。

☆終って舞台から下がる時は、お役の人に合わせて左膝を立てて左を向き、舞台へ入った時の逆順（最後に出た人から）に切戸口から下がります。なお、都合により橋掛りの方へ下がる時（この場合は事前に連絡があります）は右を向く外は同じです。

## Ⅶ 注意すること

### ① 役謡と地謡

発表会等においては、役謡は曲柄をわきまえて、シテはシテの、ワキ・その他の役も、それぞれの位を持って謡う事が求められます。また地謡は、数人の同吟ですから、全員が揃って謡う事が絶対条件です。

### ② 地頭に合わせる

地頭は、地謡に関しての統率者・プロデュースであり、謡い出しの高さや位を決める重要な役を担っていますから、地謡に参加した場合は、地頭の謡う声をしっかり聞いて、半拍程遅れて謡い始め、句末は地頭より引かないで止めます。

従って、地頭より先に謡い出したり、地頭を無視して勝手に謡う事は論外です。

### ③ 地頭の座る位置

地頭の位置は、その列の人数によって異なるので、後列に並ぶ場合は注意が必要です。

座る位置を、地頭を①、副地頭を②、として序列順に切戸口側から示すと

二人の場合	…	①	②				
三人	〃	…	②	①	③		
四人	〃	…	③	①	②	④	
五人	〃	…	④	②	①	③	⑤

となります。

### ④ 袴の着け方

袴は、可能な限り流儀のものを用い、特にお仕舞いでは行燈袴は好ましくありません。また、角帯いっぱいには袴紐を持ち上げ、帯が見えない様に着けます。袴紐の十文字は、横が長く縦は短くなるようにします。

なお、袴を着けた時に、前に比べて後ろが下がっている、袴の尻下がりは厳禁です。

### ⑤ 眼鏡や装身具

眼鏡は、目の悪い者にとっての必需品ですが、素謡いでも無本の時やお仕舞いの時は、はずして着けません。時計やネックレス等の装身具も、はずして着けない事は当然のことです。



## VIII お仕舞の出退場

### ① 舞手が一人の場合

- ☆切戸口から舞手が1番目に出て横座の前列中央に着座します。(扇子の扱いは前記)
- ☆次に地謡は、横座の2列目に切戸口に近い方から全員が真ん中に納るように着座します。
- ☆全員が揃って扇子を前に回します。
- ☆舞手が扇子を持って立上がり、大小前に進み出て仕舞の構えをして舞始めます。
- ☆大小前で舞い終わったら、再び扇子を持って立上がり、横座の元の位置に戻り着座します。
- ☆扇子を全員が揃って扱います。(扇子を袴のヒモに差します)
- ☆舞台に出たときの逆順に切戸口から下がります。

### ② 舞手が複数の場合

- ☆舞手が複数人の時は、舞手の全員が前列の真ん中に納るように、一番手から切戸口に近い方から着座します。
- ☆以下、一番手から立上がって舞始めの位置に出て舞う他は、一人の場合と同様です。
- ☆最後の舞手が元の位置に戻り着座したら、扇子を全員が揃って扱います。

### ③ 舞手が複数で簡略化する場合

- ☆先ず地謡が出て、横座の前列に切戸口に近い方から着座します。
- ☆地謡の準備が出来た頃、一番手が扇子を両手で持って(袴のヒモには差さない)切戸口から出て、大小前に進み舞い始めます。
- ☆大小前で舞い終わったら、再び扇子を両手で持って切戸口から下がります。なお、進行上の都合で、橋掛りの方へ下がる事もあるので、地頭等の指示に注意が必要です。
- ☆最後の舞手が舞い終わったら、地謡も扇子を全員が揃って扱い、舞台から下がります。

### ④ 舞囃子の場合

- ☆切戸口から舞手が1番目に出て、地謡座の前に目付柱を向いて着座します。
- ☆次に地謡が切戸口から出て、見所に近い方から地謡座の前列に2人、後列に3人が舞手を3角形の頂点になる様に、これも目付柱を向いて着座します。
- ☆最後に囃子方が、笛・小鼓・大鼓・太鼓(出ない場合もあります)の順に出て着座します。
- ☆扇子を全員が揃って前に回します。
- ☆舞手が扇子を持って立上がり、大小前に進み出て舞始めます。
- ☆大小前で舞い終わったら、再び扇子を持って立上がり、元の位置に戻り着座します。
- ☆扇子を全員が揃って扱います。
- ☆囃子方が、笛・小鼓・大鼓・太鼓(出ない場合もあります)の順に切戸口から下がり、続いて地謡も舞台に出た時の逆順に切戸口から下がります。(従って舞手が一番最後)

## IX その他

### ① 段物について

謡本の頭註に、小謡・独吟・囃子などと書かれていますが、段については謡本（大成版）の頭註によるもの（正と表示）のほか、現在常識的に通用しているもの（俗と表示）、その他新しく提唱されているもの（他と表示）を次に記してみます。

正	網之段（櫻川）、鮎之段（國栖）、鶉之段（鶉飼）、鐘之段（三井寺）、 笠之段（芦刈）、車之段（百萬）、駒之段（小督）、琴之段（咸陽宮）、 麩之段（自然居士）、笹之段（百萬）、玉之段（海士）、文之段（熊野）、 弓之段（花月）
俗	舟之段（兼平） … 一念三千の機を ～ 粟津に早く着きにけり 糸之段（安達原） … さてそも五條あたりにて ～ 鳴きあかす 砧之段（砧） … 蘇武が旅寝は北の国 ～ 砧の音やらん 枕之段（葵上） … 思ひ知らずや ～ 隠れ行かうよ 薪之段（鉢木） … 仙人に仕へし ～ よく寄りてあたり給へや 果之段（通小町） … 拾ふ木の實は ～ 花たちばなの一枝 雨之段（雨月） … 軒端乃松に ～ 雨の名残と思はん 鼓之段（籠太鼓） … 鼓の聲も時経りて ～ あらなつかしのこの籠 筐之段（花筐） … 打ち落とし給ふ人々こそ ～ 叫び伏して泣き居たり
他	心之段（弱法師） … あら面白や ～ 更に狂わじ 鶇之段（隅田川） … 我もまた ～ 賜び給え 草之段（雲雀山） … 頃を得て ～ 花橋や召さるゝ 扇之段（班女） … 月を蔵して ～ 恋は添ふものを 虫之段（松虫） … それは賢き古の ～ 残るらん

### ② 小謡について

小謡は酒宴等の席で、座興や中締とし謡われる場合があります。また、発表会の終りにも、その会が目出度く終るとの意味から、附祝言として謡われます。

なお、追善の会では当然のことながら、附祝言でなく追加として法要の意を表します。

祝宴（婚礼）では、高砂の「四海波」や養老の「老ひせぬや」などですが、四海波を同吟する時は、繁茂させるとの習いから「枝を」からつけます。なお附祝言では、その日の番組に出た曲は謡わないので、留めの曲の地頭はその日の番組をチェックをして、何を謡うかを周りに伝えなくてはなりません。

追善・仏事の席では、江口や融のキリ などが一般的に謡われます。

③ 独吟について

独吟も小謡と同様に、番謡の中から謡どころ聞かせどころを拾い出したものですが、小謡は座興の意味合いで謡われるのに対して、独吟は一人で芸術的発表として謡うものと云えます。

④ 連吟について

連吟とは、独吟の箇所などを番謡の中から、一部分を取出して二人以上で謡うことで、番謡（素謡）のシテやツレなどが連吟するのとは別物です。連吟では、地頭を務める者のほか、シテなどのお役を務める者も選定しておく必要があります。

⑤ 一調について

一調は囃子方が中心のもので、謡方のものではありません。

従って、小鼓方（幸・大倉・幸清・観世）、大鼓方（葛野・高安・大倉・石井・観世）、太鼓方（観世・金春）、笛方（一噌、藤田）の各流でそれぞれ定めており、謡方はその囃子に合わせて地拍子（八ツ割）に従って謡うのです。

なお参考までに、観世流・大成版の謡本の頭注に記されているのは以下の7曲です。

蘆刈	…	あれ御覧ぜよ御津の浜に ～ 心おもしろや(鉦鼓)
土車	…	この歌の理に ～ 皆うち捨てゝ狂はじ
鳥追舟	…	あれあれ見よや ～ なほもいざや追はうよ
花筐	…	打ち落とし給ふ人々こそ ～ 叫び伏して泣き居たり
放下僧	…	浦の湊の釣舟は ～ うち治まりたる御代かな
松虫	…	それは賢き古の ～ 虫の音ばかりや残るらん
籠太鼓	…	鼓の声も時経りて ～ あらなつかしのこの籠(鉦鼓)

(付録)

① 一般的に用いられている分類など

☆三勝修羅	箴、田村、屋島	
☆三修羅	実盛、朝長、頼政	
☆三老人	西行桜、木賊、遊行柳	
☆三盛	実盛、通盛、盛久	
☆三貴人	玄象、須磨源氏、融	
☆三離別	景清、俊寛、蝉丸	
☆三盲人	景清、蝉丸、弱法師	
☆三殺生	阿漕、鶺鴒、善知鳥	
☆三鬼畜	小鍛冶、殺生石、鶴	
☆三婦人	大原御幸、定家、楊貴妃	
☆三老女	姨捨、関寺小町、檜垣	
☆三鬼女	葵上、安達原、道成寺	
☆三読物	勸進帳（安宅）、願書（木曾）、起請文（正尊）	
☆難クセ	歌占、白鬚、花筐	
☆座敷謡三番	大原御幸、砧、蝉丸	
☆三ござる	安達原、道成寺、籠太鼓	(狂言方の活躍する曲)
☆七小町	鸚鵡小町、通小町、関寺小町、草子洗小町、卒都婆小町、のほか (廢曲の清水・高安)	
☆負修羅	敦盛、兼平、清経、忠度、経正、通盛	
☆狂女物	桜川、隅田川、蝉丸、三井寺、花筐、班女、雲雀山、百萬	

② 構成等に特徴のある曲

- ☆両シテの曲 通小町(駄)、小袖曾我(五郎)、千手(重)、蟬丸(綱)、二人静(葉女)
- ☆シテの語り 阿漕、碇潜、鵜飼、采女(2カ所)、梅枝、江野島、箆、烏帽子折、大原御幸、景清、賀茂、楠露、鞍馬天狗、項羽、實盛、田村、定家、融、朝長、錦木、野守、氷室、船橋、松虫、松浦佐用姫、水無月祓、求塚、屋島、頼政(前・後)
- ☆無言のシテ 室君、羅生門
- ☆クドキ 葵上、海士、柏崎、春栄、俊寛、隅田川、撰待、草子洗小町、鳥追舟、富士太鼓、二人静、松風、松山鏡
- ☆文(フミ) 藍染川(シテ・ワキ)、柏崎、高野物狂、桜川、花筐、熊野(文の段)
- ☆ワキの能 大江山、谷行、張良、羅生門
- ☆両ワキの曲 柏崎、鳥追舟
- ☆ワキの語り 七騎落、隅田川、撰待、道成寺、道明寺、鉢木、藤戸
- ☆ワキなし 歌占、木曾、楠露、小袖曾我、三笑、禪師蘇我、橋弁慶、夜討曾我
- ☆ツレの語り 土蜘蛛、放下僧
- ☆二段グセ 杜若、柏崎、小鍛冶、千手、花筐、百萬、二人静、山姥
- ☆片クセ 阿漕、安達原、海士
- ☆小歌拍子等 花月、放下僧、隅田川
- ☆甲グリ(柔) 鸚鵡小町(この一曲のみ)
- (剛) 鵜飼、老松、花月、志賀、忠度、龍田、巴、白髭、須磨源氏、花筐、山姥
- ☆ハコ節 望月

③ 宴席でよく謡われる小謡など

☆祝言の席

	嵐山	…	さながら此處も ～ 榮ゆく春こそ久しけれ
	岩船	…	金銀珠玉ハ降り満ちて ～ 榮うる御代とぞなりにける
	老松	…	齡を授くるこの君乃 ～ 久しき春こそめでたけれ
	春榮	…	なほ喜びの盃乃 ～ この時を言ふぞめでたき
	猩々	…	よも盡きじ ～ 盡きせぬ宿こそめでたけれ
	高砂	…	千秋樂ハ民を撫で ～ 颯々の聲ぞ楽しむ
	難波	…	この音楽に引かれつつ ～ 萬歳樂ぞめでたき
	白樂天	…	げにありがたや神と君 ～ 動かぬ國ぞ久しき
(婚礼)	皇帝	…	壽なれやこの契り ～ 盡くる時もあるまじ
	高砂	…	四海波静かにて ～ 君乃恵みぞありがたき
	〃	…	高砂やこの浦舟に帆をあげて ～ はや住吉に着きにけり
	玉井	…	長き命を汲みて知る ～ 深き契りハ頼もしや
	俊成忠度	…	およそ歌には六義あり ～ 夫婦の媒ともこの歌乃情なるべし
(新築)	鶴亀	…	庭の砂ハ金銀の ～ 君の恵みぞありがたき
	東北	…	所ハ九重乃 ～ げにげに花乃都なり
(成人)	烏帽子折	…	この烏帽子を召されて ～ 桜乃花咲かん頃を待ち給へ
	〃	…	かやうに祝ひつつ ～ 申すとも不足よもあらじ
(送別)	蟬丸	…	互にさらばよ ～ 泣く泣く別れおはします
(宴)	猩々	…	老いせぬや老いせぬや ～ この友に逢ふぞ嬉しき
	竹生島	…	緑樹影沈んで ～ 面白の島乃景色や
	熊野	…	四條五條の橋乃上 ～ 名に負ふ春乃景色かな
	吉野天人	…	見もせぬ人や花の友 ～ いざいざ馴れて眺めん
	來電	…	筆の林も枝茂り ～ いかでか忘れ申すべき (卒業式や謝恩会)
	羅生門	…	ともなひ語らう諸人に ～ 頼みある仲乃酒宴かな
	難波	…	げにや津乃國の ～ げに道廣き治めなれ

☆法事の席

	海士	…	佛法繁盛 ～ うけたまわる
	井筒	…	草茫々として ～ 跡なつかしき景色かな
	鵜飼	…	げに往来の利益こそ ～ 他を濟くべき力なれ
	賀茂	…	年の矢の ～ 手向けなりける
	田村	…	げにや安楽世界より ～ 仰ぐも疎かなるべし
	融	…	この光陰に誘はれて ～ 名残惜しの面影
	遊行柳	…	此界一人念佛名 ～ 上品上生に到らんことぞ嬉しき
(追善)	弱法師	…	萬代に澄める亀井の水までも ～ 皆成佛乃姿なり
	江口	…	思へば仮の宿 ～ ありがたくこそは覚ゆれ
	朝長	…	悲しきかなや ～ 亡魂幽霊もさこそ嬉しと思うべき
	藤戸	…	則ち弘誓の船に浮かめば ～ 成佛の身とぞなりにける
(弔い)	朝長	…	げに北邸の夕煙 ～ 亡き跡ぞ哀れりける
	天鼓	…	よしさらば ～ 命のみこそ恨みなれ
	卒塔婆小町	…	これに就けても ～ 悟りの道に入ろうよ
	東岸居士	…	萬法皆一如 ～ 實相の門に入ろうよ
祝言	猩々	…	盡きせぬ宿こそめでたけれ

(蛇足ながら)

諸祝儀の席では、死ぬ・冥土・苦しむ・乱るゝ・憂い・涙・悲しみ・哀れ・はかなし等の不吉な文句（言葉）の含まれる曲は控え、また結婚式では、返す・破れる・去る・退く等の文句の含まれる曲も謡いません。更に、建前や新築祝いでは、燃ゆる・火・煙・焼ける・崩れる・倒れる・傾く・住み憂し等の文句は厳禁です。

なお、追善・仏事の席では、迷う・闇・暗し・浮かび難し・苦しむ・地獄・瞋恚などの文句を禁ずるほか、その家の宗旨にも注意が必要です。例：法華宗に百萬の「弥陀たのむ人は…」や、浄土宗で砵の「法華読誦の力にて」など

以上